誰を知らない

一

インターネットを仕(し)ていて少し笑う。こんなアンケートがあった。

宇宙人はいると思うか

①いる

②いない

③実は私が宇宙人だ

なんだよこの回答と思う。笑った序(つい)でに③を選ぼうとして、ピタリと手を止める。この回答は、質問者側の機智(きち)を問うた場合及第点と言えるものだと思うが、回答者側として③を選んで果(はた)して面白いだろうか。案じた挙句(あげく)①を選び、投票の結果をみると、①よりも②

よりも③が多く半数を超えていた。あーあと思う。目先の面白さに囚われて凡な結果に陥入ったな。批判した後①に投票した自分を省りみて夫もどうだろうと思った。

どうしたら面白い回答が出来ただろう。③に投票した場合のことを考えた。Aはインターネットをしている。サイトを見て回っている内、或アンケートに出逢う。「宇宙人はいると思うか」Aは事もなく③を選ぶ。「実は」とはなにが「実は」なのか分らない。投票結果を見ると、総数八千票の内、五千票近くが③に入れられていて、意外に多いんだと驚ろく。

Aは三代目の宇宙人だ。祖父が地球にやってきて、父を生み、自分が生れた。祖父はAが生れた時すでに亡いものになっていた。日本兵として徴集され、戦地で鬼籍に入ったと言う。父に故郷の星を問う。

「おれも知らね。行った事ないし、言葉も喋舌れんしね」

祖父と共に地球へ来た祖母も、いまはぼけており、伯母夫婦が面倒を見ている。

「おばあちゃん、星のこと、教えてよ」

「おおたけしか、テストはどうだった」

Aが声を張り上げ、丁寧に丁寧に手に握らせた球は、Aの元に返ってきた時ゴム鞠になっていた。AはAという丈あってAなのでたけしという名ではない。

Aは自分が何者であるか知らないのを、恥しく思った。探して見ようと思ったが、手懸りはなく、何所から手を付ければいいのかわかり兼ねた。自分は何所から来て何所へ行くのか。此所に生れて来た意味とは、価値とは。一度だけ相談した中学校のクラスメイトには、「哲学的だな」と一笑に付された。

クラスメイトはMと言った。Mは中学二年の秋、突然「自分は宇宙人である」と喚き立てた。

「おれは宇宙人だ。おれの星は文明が進みすぎて、生態系が崩れ、移民せざるを得なか

ったんだ。だから皆な、地球のこと、もっと大事にしてくれ」

突如騒ぎ出したクラスメイトを、クラスメイトは冷然と眺めた。「とうとうぶっ壊れた」

「そこまでして目立ちたいかね」囁やき合う声が、Aの胸を螫した。異端に対する冷気を、肌で感じた。しかし自分の同士がいたことに嬉しみを隠せず、放課後、Mのもとに馳け寄った。

「M君、おれも、宇宙人なんだ」

相手も喜こんでくれるものと信じていたが、Mは「お、おお」と戸惑った様に答えた丈だった。

然しその後二人は仲好くなる。単に、相性が合った為だろう。Aは星の話しをしたがり、Mはしたがらなかった。しかしいざすると、Mは喃々としゃべった。

「文明進んでたって、どの位進んでたの」

「夫りゃあ、あれだよ、地球なんて比べものにならないな。車は飛んでるし、水不足や、

飢饉なんてないし、まあ楽園だな」

「銃は？」

「夫りゃあ光線銃でしょ、やっぱ」

「移民して来たって言ってたけど、Mの世代が始めて移民したってこと？　うちはおじいちゃんやおばあちゃんが移民した世代だから、星のことわかんないんだ」

「ああ、左右だな、いや、おれが物心つくかつかないか位かな。うちの両親が、ほかの人引き伴れて、来た訳」

「へえ、すごいねえ、今度おじさんとおばさんに会わせてよ、もっと話しききたい」

「ああ、今度な」Mは言ったが其今度は訪ずれなかった。Mはほかにも「いとこにアイドルがいる」や「いままでに出た凡てのゲーム機をもっている」と華やかな経歴を話した。Aはすごいと言い見せてや遊ばせてと言ったが、其度に「今度」という答えが返って来た。

Aは、Mのことを、信じ切らなかった。然し、同時に、凡てが嘘であるとも思わなかっ

た。夫はAが純であるからでも、同士の存在を信じていたいからでもなかった。Aは、凡てが嘘な訳はないと、ただ常識に囚われた。其様な嘘を吐く利点がないし、其様な人間が存在するとも思えなかったから、疑がわなかった。

夫には此様な事件も影響していた。二人が並んで帰っている時、呼び止められた。

「おい、宇宙人」

二人は同時に振り向いた。見ると、隣りのクラスの不良がいて、笑っている。

「まじかよ、宇宙人で振り向いた」

不良の一人は気安くMの肩を抱いた。Mは固まっている。Aも固まっている。恐怖心が湧いた。

「お前って、まじで、宇宙人なの」

Mは何も答えない。「まじだって」別の不良が言う。ぎゃははと笑う声が、益二人を威圧する。

「なに、じゃあお前も、宇宙人」

矛先はAに向いた。矛先と言うが、実際に、刺さっている心地がする。「いや、別に……」Aは答えていた。

「宇宙人、いいな、星に帰る時はおれも誘ってくれよ」

不良はまたぎゃははと笑って去って行った。AはMのことを窺がう。MはAのことを見なかった。二人は黙って、帰った。

其出来事は二人の関係に、直截的な影響を及ぼした訳ではなかった。ただAは、裏切ったという様な、気もちを抱いた。Mはどうだっただろうか。MはAを責めなかった。然し二人の間で、其出来事が話頭に上ることも、又なかった。

二人はやがて高校へ進んだ。示し合わせた訳でもなかったが、学力も同程度だったため、同じ学校を選んだ。夫が二人の人的な広がりを妨たげたと言えば、言えるかも知れない。処世に長けていなかった二人は、自然身を寄せた。夫は他者を排斥する態度だとも心付か

ず。

Aは「俺(お)はいつか星に帰りたい」と言った。Mは曖昧(あいまい)に頷突(うなず)いた丈(だけ)だった。「自分のことを、知りたいんだ」Aは言った。自分が、いつか帰ることを、疑(うた)がわなかった。

二

桜が咲く。桃色とは違う、桜色。散った花がアスファルトに乱れていて、醜(みに)くい。昨日は雨が降った。地面で濡れた花々が、清潔を乱す。

Bは女の子だ。端正な顔立(かおだち)をしている。ただ、眉毛(まみえ)はもう少し細い方が現代的ではないか。幼(おさ)なさの為か、性質のためか、手入れを少しく怠(おこ)たっている様だ。

Bは先日男の子に失恋(ふら)れた。約三週間付き合った子で、Bが失恋を得るのは、もう七人目になる。中学生で七人も交際したという事実は、聞く人にも依(よ)るだろうが、驚嘆に値(あたい)

する人も多かろうと信ずる。Bは外見が好いため告白をすれば交際には至る。しかし長くはもたない。一カ月と半月が、最長記録だ。

Bは桜を見上げていた。地を見て、踏み躙る。濡れた花は泥で汚れた。なにか恨みでもあるのだろうか。腹立たしげに踵を返して学校へ向う。

Bは猛烈だった。「私を理解して」と、交際を始めた男へ言った。自分の思想や愚痴、鋭どい考察を思い付く端から言った。其後で、相手が理解を示せば、「上辺だけの同調は廃めて」と言い、「わからない」と言えば、「どうして分らないの」と喚き立てた。

Bが付き合った男に中野君という子がいた。中野君はなにが目的か知らんがBときちんと向き合おうとした。

「君はどうしてって言うけど、そりゃあ、わからないよ。ぼくらは違う人間なんだから。理解できないっていう前提から始めないと、いつまでも、此距離を埋められないよ。ぼく

らは川の両岸にいるようなものだよ。遠くって、声だってよく聞えない。でもお互いが川沿いに歩いて行けば、いつか、川幅が狭くなって、すぐそばにまで近けるかもしれないじゃないか。歩み寄るんだよ。夫には、ぼく丈が歩いても仕方ないんだ」

中野君の論説をきいて、Bが発したのは、「わからない訳ない」という一語だった。

中野君が一カ月と半月もったという勇者である。先日Bが失恋れた男は、「お前重いよ」や「癲狂れてるって噂は本当だな」という言葉を投げつけて去った。

Bは夢を見た。自分が、宇宙人であるという夢だ。母星は美くしく、天国のように安らかで、Bはそこでなら穏かに眠れた。夢を余り見ないBは、一カ月ぶりに見たその夢に憑かれた。忘れることのないようノートに記し、夜毎読み返して牢記した。自分で自分を縛り付けたが、夫が羈であるとは思い得なかった。

夫に依れば母星に帰るには協力者が必要だった、ノートには日々Bが書き足すので、どこまでが夢であったのか本人さえ定かでない。本人は凡てが夢であったと思っている。此夢を何度も見たとなれば少しは詩的、物語的だが脳の気まぐれがどうして願望如きに左右されるだろう。Bは一度だけ見た夢に獅噛み付き、夢を夢でないものにさせて仕舞った。

Bは協力者を探していた。其為に、まず自分の凡てをわかってもらおうとした。「癲狂れてる」という噂が立つ程の彼女であるのに、自分が宇宙人であると告白するのは逡巡ったというのだから可笑しい。人は誰しも自分が「ここまで」行っているものと思わない。他の評価が「ここまで」行っている彼女も、自分のことを「ここまで」だとは認め得ない。彼女は自分が宇宙から来たと他に言って仕舞えば、「ここまで」、つまり引き返し不能な、取り返すことのできない地位まで行って仕舞う気がして、相談し得なかった。

彼女はどうして誰もいないのだろうと思った。自分を母星へ帰すまいという悪意が働らいているのでは、疑がう。どうして誰も私を理解しない。中野君は昔し言った。

「じゃあ、君はぼくの事分ってくれてる？」

私のこと分ってくれれば、いつだって分ってあげるわよ。彼女はそう叫びたかったが、中野君の幻像は、消えていた。

三

「あ、ごめんなさい」

廊下でぶつかりそうになる。咄嗟に詫まった。相手はペコリと頭を下げ、去って行く。可愛い子だなと思った。「おい」立ち止った儘のAをMが呼ぶ。

AとMは高校で、同じクラスになった。部活にも入らず、アルバイトもせず、二人は自堕落に過した。色恋沙汰さえ満足なものはなかった。夫でも彼らには「高校生になったら」

という漠とした華やかさへの憧がれがあったので、現状に満足も決してしなかった。

或日Mが叫んだ。

「女の子と遊ぼう」

Aの家で、ゲームをしていた時だったので、Aは中断して嫌な顔をした。

「ええ？」

「もう中坊（中学生）じゃないんだしさ、もうすぐ夏休みだろ、こうしてても前と一所じゃん。おれ彼女欲しいよ。こうしてる間に、やる奴はやってんだぜ。其様なの不公平だろ」

「おれはいいよ」Aは答えた。ゲームを再開して、画面を見遣る。彼は本当に「いい」詰りご遠慮申すとの気もちでこう答えた訳ではなかった。理由はいくつか有る。自分の様な華としないものでは世の女子に選ばれないだろうという卑下、かと言って華とする様に盛装するというのも恥しいという鬱屈、其様に浮世を放下するのも迎合するのも出来ない自分が女性を冀求するのは、傍から見て見窄ら

しいものに映るのではという難解な危惧、左して一番は求めた挙句に得られない、詰り失敗、詰り失恋れるのを怖れる気もち、抔から彼は捗々しい返事をし兼た。

夫と此様な事も考えた。おれがもし星へ帰る日が来て、其日に最愛の人が出来ていても、おれは彼女を連れて行けないしな。

「いいよとか言うなよ。いいよとか言うなよお前。おれ今となりの席のLちゃんと結構しゃべるから、誘ってみるから、オッケーだったらお前も付いて来いよな」

もしAが本当にご遠慮申すの気もちを抱いていれば、ここで断然辞退する筈だった。しかし彼はしなかった。彼にはただ求めても得られない愚茶々々した感情がある丈だった。彼は世の中と自分とに失望していた。夫は浅い、「がっかりした」とでも表するのが適当な程度の失望だったので、同時に期待もし、確然と返事をしなかった。

だから翌日、Lちゃんに話しを持ち掛けら

れず、もじもじしているMを見て、期待を裏切られた心もちがした。夫にMが結構話すと言ったLとは、Aの印象では左程仲が好さそうではなかった。話すとしても、一日に一二度ではないか。Aは自分がとなりの席の女の子とは一切話さないことを忘れて、上の立場から鑑定した。うえしたがあるとするなら、行動を起そうとしたMの方がAよりも現実世界に於て遥かに上だった。しかし吾々は、個人であるという意味に於て（個人としての視点で世界を見るという点に於て）厳正なる現実世界に起居しているとは言い難いので、AはMのことを真に凄いとは認め得なかった。

Mはもじもじして何度もチャンスを逸しながらも、帰る間際にLを誘い得た。豈計らんやLの答えは「いいよ」だった。「私も、じゃあBちゃん誘ってもいい」Mは一も二もなく応と答えた。「ところで、お前Lちゃんのこと好きなの」あとでAがMに問うと、「うーん、別に」と考えた末に返答が来た。

夫でもMは喜こび勇んだ。Aも、期待した。彼らはこうして夏休みを迎え、こんなにワクワクした気もちで日々をすごした事はないと、Aは考えた。

四

廊下で何度か擦れ違ったきれいな人だと思った。思うと緊張して来た。緊張してもしなくても彼は楽しいお喋舌り抔出来ないが。

Lが伴れて来たBという子は、細身で背が小さく、黒い髪を二つに束ね、渋々伴れて来られたという感じを隠そうともしない女の子だった。Aは頭を下げたが彼女は目さえ動かさなかった。Lさんとも挨拶する。A、M、Lはクラスが一所だがAはLと話したことがなかった。

四人は是から映画を見に行く。並んで映画館へと赴むく。Aは自然な気もちとしてMと歩きたがった。なぜならBともLとも話した

ことがなく、気まずい時間になることが容易に予想できたから。然し是はデートに誘った男として最低の処置と言えた。女の子を楽しませ様という心構えもなく女の子をデートに誘うものではない。Ａには幾つかの言い訳があった。俺れ最初から乗気じゃなかったし。これ別にデートじゃないよな。其言い訳があれば自分は胡麻化せた。然し自分への言い訳は口に出さなければ相手には届かず、口に出せば愈相手から見限られることを、この時点の彼は知らなかった。

　ＭはＭで気まずいのが嫌だったので、Ａと隣り合って歩いた。ＢとＬは後から跟いて来る恰好になった。二人はおれたちいつも通りだぜ、緊張なんかしていない、従容たるものだぜ、という態度を表わす為に大声で話す、笑うなどした。二人は時々ちらりと振り返った。ＢとＬは黙然と付き蹤がった。彼女らは彼らを黙然の裡に圧迫した。圧迫されつつもＡは仲が好いから伴れて来たんじゃないのか

なあと疑問に思った。

圧迫された男子は知らず早足になり、大分先に館へ着いた。AとMは待った。少し離れた所に二人がいる。彼女らは今度は話していた。Bが笑った。小さな口が開く。歩く速度も緩漫として、二人は須臾館へ着いた。

着いたBは待ち合わした時の無愛嬌な表情に戻っていた。Aは先程の顔との差異を考えた。口が開く。目は俯し目勝ちで、睫毛が長く見えた。笑うと頬に波が起きる。暑い夏の日は、ほんの数分表を歩くさえ、汗を道連とする。Bの頸筋の汗が光った。Bの無表情と、染み出した身體の熱。Aも暑さを感じたが、同時に、容易には発散できない熱を内に蓄わえた。

映画と言うのは今話題のSF映画だったが其所については一先ず措く。Bは席に座り、暗くなると、中野君のことを思い出した。

中野君と付き合ったのは一カ月と半月だ

と、娓々く言ったが、他にも特色があって中野君とはBがふって終ったのだった。Bがふったのは中野君丈で後は凡て失恋れている。Bはなぜふったのだろうと、後悔することが時々あった。後悔をするなするなら反省をしろと言う人がある。蓋し尤もである。然し後悔とは襲って来るものだ。反省はするものだ。吾々凡人は襲われた時の準備が出来ていない。襲われるが儘になる。時々は抗拒うが、……後悔はいつも手に余る。手に余るから後悔する。

Bは中野君が怖かった。まっすぐな彼の態度が（又其態度を自分に打衝けて来るのが）怖いと感じた。頑くなな自分というものが溶かされる気がしたのだろうか。吾々は変る癖に変らないことを願い、変りたいと願いつつ成長もせずにいる。自分が成長をしたと誇負するものは自己を顧みる能力がないのを誇負しているのと選ぶ所がない。凡ては移い変ってゆく。然しどう変るかは分らない。変

らないでいるのは只変化が停滞しているに過ない。停滞は不変の証明にはならない。然し自分の努力次第で変化を方向付けられるのもまた真理であろう。

Bは中野君と映画に来たことがあった。中野君は泣いていて、夫を見てBは笑った。朗らかな気もちで。恋人達のじゃれ合い。夫を自分は欲していたのではと疑がう。どんな映画だったかなと思い出そうとしてBは愕然とする。覚えていない。そうか、もう、あれから二年も経つんだ――Bは賑やかな暗い場所にいて、となりにはよく知らない男子達がいる。

夏だから日は暮れていないが、もういい時間なので御餐を喰べることになった。映画を見終った後、近くのファミリーレストランへ移動した。

Aは何だこれと思った。席に着いてから、料理が来るまで、交したのは「メニュー見

る？」や「これおいしそう」などの言葉のみで、会話と呼べるものは更になかった。Ａは目線をどこに置いていいのかと右顧左眄した。ファミリーと冠する丈有って家族連が多い。どのテーブルも和やかに見えて、気まずいのはこのテーブルだけではあるまいかと思った。

ハンバーグを頼んだＭは、切り分ける手を止めて、ぽつりと独語やいた。

「あの監督、宇宙人らしいね」

余り突拍子もない一言なので、みながＭを見た。

「どういうこと」

「いや、あの監督、きょう見たのもそうだけどＳＦ映画ばっかり作ってんじゃん。あれってあの監督が宇宙人だから（あれ、宇宙人の手先だったっけな）とに角だから宇宙人の存在を映画界から広めて行こうとして、そういうの作ってるんだって」

みなは夫々の反応をした。

「そういう人もいるんだね」Aは感心する。

「それおもしろい、だからなんだ」Lが笑う。

Bが身をのり出して、Mを睨む。

「それは、本当の話しなの」

「あ、いや」思わず身を引く。「噂話だよ。そういう本があって、そういう記事が載ってたんだ。だから、別に、信憑性がある訳じゃないし……」

「でも火のない所に煙は立たないって言うし、可能性はある訳ね。ねえ、どうやったら知り合えるかしら。外国まで行けばいいの？どの辺り？　ああ、英語の勉強もしなくちゃならない。手掛りなんていつも突然で……」

突如饒舌り出したBを、みなは驚ろいて見詰めた。途中から独語になっている。AとMは顔を見合せた。卒然Lが喋舌った。

「実は、私も宇宙人なんだよ」

みながLを見た。

「地球に住んでるから、地球人でしょ。だ

ったら、宇宙に住んでる私達も、宇宙人じゃない」

Mは「たしかに、おれも宇宙人だ」と感心した。Aも感心したが、Aは頭を抱えているBを、独特でいいなと思った。普通じゃだめだよ。恋は妙な膜を視界に貼る。其膜が掛った時、平生は欠点と思う所も、美点に映る。悲劇なのは其膜が剥げた時で、好きな人が、嫌いになる。膜が重なりすぎた重みで一気におちるのかも知れないし、時間の経過と共に溶けて剥がれるのかも知れない。膜がない人はしあわせだ。しかし恋の楽しみを知らない。楽しみがあって、其分嫌なこともある方がいいのか、最初から其んなものない方がいいのか、夫は人によると思うが、Aの瞳にはいま確実に一枚の膜が貼られた。

映画の話しが嚆矢となって、なんとか場を繋ぎつつ一行は食事をおえた。観覧車に乗ろうという提案が出た。歩いて数分の所に観覧

車があり、向うと、人が行列を作っていた。三十分待ちだと言う。「どうする」Mが言った。「乗ろうよ」Lが答える。「だよね」とMが言ったが、其語調から、彼があわよくば帰ろうとしていたのをAは察した。

二人ずつの列で、自然、MとLが前、AとBが後に並んだ。Aは話しをしようと試みた。

「Bさんって、何組なの」

「1組」

「休みの日は、何してるの」

「別に」

「英語は？　苦手なの」

「……」

無視をされた時、Aは挫けた。恋という恋も始っていないのに、膜が剥げそうになる。前の二人は和やかに話していた。うしろの二人は黙る。Aは苦痛や屈辱を覚えたが、段々、これはこれで気を遣わなくていいなと思った。そう言えば、恋人同士で、沈黙を共有で

きる人がいいという話しを聞いたことがある。Bの顔を窺がって、其可憐な目瞬を確認すると、膜は故の位置に帰した。

観覧車にのり込むと、二人の空間ということが意識された。緊張したが、意識のそとに追い出そうとする。向い合った二人は無言の儘天へ昇っていった。街の灯りが見える限りに広がって、海に夥しい灯りを浮べた様に見える。「きれいだな」Aは言ったがBは答えなかった。頷突いた様にも、見えない。まあいいさとAは空を見上げる。灯火で邪魔されて見え悪いが、微かに星が見えた。Aは突然、郷愁に胸を締められる。「星に近いてる」我知らずつぶやいた。Bも見上げる。「あの星のどこかに、だれかが住んでる」Bもつぶやいた。Aは「そうだね」と答える。其調子が、嘲けりも、距離を置いた同調も、ない只優しく添えられた言葉だったことに驚ろいてBはAを見る。Aは星を見ていた。

二人は是だけの言葉を交して観覧車を降り

た。降りた先で、MがLに頬を張られていた。Lが憤然と帰って行く。訳を聞くと降りる間際無理矢理にキスを迫ったのだという。Bも凛冽なる一瞥を置いて帰っていく。AはMを慰さめつつ嘲けりつつともに帰った。

五

行き違うバスを見ると、気の毒に思う。駅に向うバスは、いつも混み合っていて、人がはみ出て道に零れそうだ。Aが通う高校は、山の上にあり、高校へ向うバスは駅ゆきのものより隙いている。

Aと同じバスにのるものは殆んどが同じ高校の生徒だ。だからAは知合いに会うのを厭う。もし会って、となり合せにでもなれば、なにを話したらいいのかわからない。Aは俯つ向いて本を読む、或は読む佯をしながら漸進する。

最初はMと行っていた。然し、Mは能く遅

刻するため、廃めた。注意をするが改ためる気配はない。「おれ朝弱いんだよ」と言う。言いながらも得意の色が隠顕する。ルールを壊すことはしないのに、ルールから食み出ることを得意とするものは多い。彼等は（或は吾人は）口では已無きを已を得ず行なっているように余所負う。Mの場合では「朝が弱い」から学校に遅刻すると言う。なら愧ずべきだのに得意の色を見せる。時によると、ニヤニヤしながら登校する。食み出すことに依って自分が「普通でない」「平凡でない」地位を確立した気になるのだろうか。Aは不可解に思う。

Aは本を読む。如月弥生の「心配しないで」と言う本だ。最近嵌入っていて、同作者の本を何冊も読んでいる。登場人物の対話が軽快で、独自で、感動する。Aはページを目繰った。

「俗な本だね」

声が聞えて、驚ろく。右と左を見るが、だ

れもいない。気の所為か、他のだれかが話しかけられたのだろうと、本に目を落す。

「だれの本？」

本の先にはBがいた。背が小さいので、見落していた。Bはこちらを見ていない。自分が話し掛けられたのかと、四囲を見てから、答える。

「如月弥生って人だよ。知ってる？」

「俗な人だね。よく知らないけど」

Aは少し笑った。「そうだね」答えて、本を閉じる。然し夫以上話さなかった。本を閉じた以上、本に目を遣れないので、惑う。そとの景色は退屈だ。左右は気まずい人許りいる。Aは一人坊っちになった。

バスを順に降りた時、Bは遥か先にいた。背が小さいと、人間を擦り抜けてゆけるのだろうか。脇目も振らず歩いてゆく。其姿は、彼女も一人坊っちであることを、証明している様にも見えた。

夫から行き帰りのバスで、Bと会うことが

度々あった。朝は能く一所になった。話すこともあったし、話さない事もあった。Aには其話すこともあったという事実が大事に思われた。彼女がだれかと話しているのを、彼は見た事がなかった。すると自分が彼女に取って特別な（仮令或程度でも）存在に思えて来た。夫で図にのって自分から話し掛けた時、彼女に無視をされ彼は痛く恥じ入った。

夫でも此様なことがあった。クラスの男子に話し掛けられた。

「A君、Bさんと仲好いの」

「いや、其様なことないよ。会ったら一寸話す程度」

「そう、じゃあ、気を付けた方がいいよ。おれあの子と同じ中学だったんだけど、あの子かっこいい男子にちょっとでも優しくされると、其次の日には告白して来て大変だったんだから。顔がいいからみんな一度はオッケーするんだけど、性格がひどいからすぐ別れてたよ。一応注意だけはしときなね」

Aの鼻はまた伸びた。みんな、あの子の魅力がわからないんだ。かっこいい男子、注意しときなね、いまのAの鼻に天狗の面を被せても収まり切らないのは自明に思われた。

男子はAに話し掛けた後思った。「まあ、Aの顔だったら、問題ないだろうけど……」

Aは上機嫌で校舎を出た。帰る為に角を曲がると、Bがいたので驚ろく。ニヤニヤする顔を制し切れずに話し掛け様とするが、状況が不穏なので隠れる。Bは一人の男の子と向き合っていた。Bが徐ろに口を披く。

「好きだから、付き合って欲しいんだけど……」

Bは俯し目勝ちに言う。いつもの無表情な顔を、少しだけ赤らめて、恥羞む。其糸かに出た感情が、心を引き寄せた。優男といった體格の、告白された好男子が、答える。

「ああ、うん、喜こんで……」

美男美女のカップルが成立した。Aはフラフラと帰途に着いた。心臓がバクバクと胸を

搏って、苦しい。

六

気もちを伝えるのは容易かった。少女まんが抔を読むと、告白する迄が、いかにも一大事の様に扱かわれていて、怪しむ。好きというだけだ。相手を見て、好きという。大事なのは寧ろ告白した其後だ。

今回Bが告白した男子は、一年六組に属しているので、六組と綽名する。六組とBとは家庭科の時間一所に作業していた。裁縫をしていて、うまく縫えないので、苛付く。「なんで思う様に行かないの」Bは叫んで机を叩いた。無言の排斥が漂よう。其中、六組は机の向いから手を伸した。

「ここはね……」

慣れた手付で縫い始める。四囲が「おお」と六組を見た。「うまいね」「女の子みたい」「なにかやってるの」質問に素早く手を動か

しながら答える。Bは凝視した。六組は「はい」と渡しながら微笑んだ。

次の日には告白していた。Bは告白に失敗した事がなかったから、呼び出して、好きと言った。頬を赤らめていたのは、恥しがっていたのか、手練の一種なのか、分らない。Bは成功した。Bは凡て分って欲しかった。自分の凡てを。なに分ってもらえる訳がない？凡てを理解することはだれにもできない、夫は吾々が勝手に諦らめて仕舞った丈のことかもしれぬ。諦らめて、だから、諦らめ切れないBが烏滸なのか、諦らめる事が烏滸なのか、作者には判然としない。

Bはここではないどこかへ行きたかった。自力で到達するのではなく、だれかに、連れて行って欲しかった。

Bは言った。

「テレビでアイドルが沢山出てるでしょ。あれ、恥しくないのかしらね、あんな無能を曝らして。歌なんか非どいもんじゃない。

あれを好きだっていう女も、自分の程度の低さを曝らしてる訳よね。

「許せない、許せない、許せない、なんで、彼奴らが、私を見下げるのよ。クラスのばか女共、私が、上だって、何で分らない。簇がってなきゃなにも出来ない、言えない癖に、どうして。

「私ね、中学の時、もし神様がいるなら、どうして色んな残刻なことが世界に起るんだろうって、思ってた。だから神様はいないんだって。でも、違うんだよね。いるから残刻なんだよ。神様は非どいんだ。地球は、宇宙の中の、多くの星の中の一つだから、大して重要じゃないんだ。私達で遊んでるんだよ、私達がゲームで遊ぶみたいに。其ことを察したから、私はもう神様に大した期待は持たない。ねえ、夫が神様への復讐になると思わない？

「ねえ、あなたもそう思わない？

「あなたなら分ってくれるよね」

Bは同時に思った。「神様が持っている星の、一番大事な、中心へ、帰りたい」其所が自分の居場所だと。叫びたかった。

中野君が出て来て言った。

「復讐になるか、ならないか、そんなのはどうでもいい事だよ。君の理窟なら、神様がいても、いなくても、君には関係ないじゃないか。大事なことは、君が何を欲するかだよ。そして其為に何をするかだ。君は星に帰りたいんじゃない、ただ苦しいことから逃げたいんだろう？　だったら、隠さずに左右言えばいいのに」

布団から跳ね起きた。夢だったのか、自分で異論を拵らえたものか、わからない。呼吸が荒い。中野君が実在したのか、自分で拵らえたものか、夫さえ夢の様に不確だ。

七

Aの決意は固かった。無視をするときめた。

だれを？　だれあろうBをである。

Aは決して認めなかったが、裏切られた、気もちを抱いた。簡単に、「信じる」という覚悟を持たぬ人程、尻軽に浮々薄々と信じるという言葉を使う人程、又簡単に裏切られたという言葉を使う。然し人は簡単に依存する。深くを知った気になる。であればAが裏切られた気もちになったのも無理からぬことかも知れぬ。

Aは、報復として、Bと次バスでのり合しても無視をしようと心に誓った。なぜ誓ったのかと言うとAの性格から左右でもしなければ無視出来そうになかったからだ。ではなぜ左右までして無視をせねばならないのか。なぜAが報復などという大仰な行為に立ち至れる立場にあるのか。そう軽々と根柢を揺がしてもらっては困る。Aはそういう気分になった。其気分については説明を尽す様いま力める。

Aはまず Bのことを少なからず好いてい

た。其気もちの多寡については一先ず措く。AはBを好いていて、クラスの男子に言われたことや自分の実感から期待を持った。其期待とは「両想いになれるかも」という色恋の成就への期待だ。是程浮き沈みの激しい気もちもない。Aは期待感から浮きに浮んでBの告白を目の当りにするに及んで撃沈した。海底まで沈み水圧で破裂したものと見て差し支えない。時間を経て人状に戻ったAはBへの恨みを抱いた。恨みというと大袈裟に聞えるだろうか？　然しAは恨みというが適当な感情をBに対して抱いた。愛と憎しみは類であると人は言う。真偽はまだ知らん。ただ、Aは、Bを恨まなければ、Bを好きだった気もちが嘘になると思った。

　だから恨んだ時「おれはBのこと好きだったんだな」と思った。

　恨みは抱いても抱く丈だと外見上何の変化もない。自分がどんなに、苦しくて、泣き叫んでも、気もちを隠せば誰も何も察してはく

れぬ。Aは其所迄拗けた考えを持った訳ではないが、取り敢ずの発露として無視をすることとした。そう言うと第一段階の処置の様に聞えるが実際はAとBとの接点などごくごく稀薄で無視ぐらいしかすることがなかった。AはBをもしバスで会ってもし話し掛けられても無視をすることにきめた。

Bの告白の翌日、Aは奇妙な昂揚を味いながらバスを待った。眠れそうにないと思ったAは豈計らんやいつも通り寝た。夫をAは不足に思った。朝というものは平時より早く過ぎるのでAは不足を膨らます間もなく準備し家を出る。昂揚が湧いて来たのはバスを待っている間だ。列の中に、Bの姿を探す。明白に探してはもしBがいて目が合った時気不味いことになるので遠くを見る演技などしつつ探す。いない。是でAの想像の一端は崩れた。Aは①Aが来る。②Bが来る。③Bが「おはよう」と言う。④無視をする。ということになった時冷徹に無視が出来る様心構

えをしていた。しかし出来なかった。Aはバスにのった。Bが発車直前にのり込んで来ることは能く有ったので、Aは内心ここだろうと中りを付けていた。しかしバスは遅滞なく発車した。Aはがっかりすると同時に無視をすることにならなくて好かったと思った。もう本末を顛倒している。

帰りにも一所にならなかったが、Aは其日一度丈Bと会った。廊下ですれ違ったBは、一人で歩いていて、Aのことを見なかった。

Aは其後数日、矢張Bと出喰さなかった。だから無視をする機会もなかった。Aは緊張し、恨みを時々は思い出し、がっかりし、安心した。自分はBのこと好きだったっけなと思った。気もちは、気もちだから、たしかでないから見えないから、最初から有ったのかどうか分らなくなる。頼りとするのは記憶丈で、無意識に改竄し得る記憶は、宛にはならない。Aに取っては、好きでない方が都合が好かった。しかし自分の好きだった気もちを、

否定したくなかった。Aは何方つかずの気もちを抱いた儘、或日寝坊した。

寝坊したAは朝も喰べずに家を出て、平常もより一本遅いバスに乗って学校へ向った。平常もより人の多いバスでAは人波に揉まれた。Aはぎゅうぎゅうと押れて回転した所、少し離れた所に同じクラスの高柳君がいて、すぐ俯向く。相手が気付かなければいいなと思った。だから、俺れは、友達が出来ないんだろうなとも思った。

降りたAは、漸やく息を満足に吐いた。高柳君の位地を確認する。少し前を歩いているので、追い越さないよう緩りと進む。少し顔を上げると、高柳君の奥に、Bの姿を見た。

Bは彼氏と歩いていた。熱を込めて、何事か話している。だからと思った。一本遅いバスにのって、だから、朝見懸けなかったんだ、……話しているBを見ると、胸がぎゅっと締った。

好きだったか、左右でないか、其んなのは

どうでもよかったんだと思った。いま、苦しい。其気もちが凡てで、Aは、授業が能くきこえない。

八

Aは校舎の蔭に隠れた。不穏な空気が流れ込む。空模様は曇りで、灰色の雲が部厚く空を塞ぐ。

「別れて、欲しいんだ」

Bと対い合った、好男子が言う。風がざわざわと葉をゆらした。

「ぼくは、君のこと、怖いよ……」

勇気を振り絞る様にして言った。ちゃんと面と向って言ったのは偉い。好男子はBの顔は見なかったが、其所迄の要求をするのは酷というものだ。好男子は連日掛ってくるBからの電話やメールに怯えた。もっと、大人なしい子だと思っていた。Bからの電話を取ると一時間は優に話した。正確に言うなら話し

をきかされた。一度終っても又掛って来ることもあった。電話に出なければ、「いま何してるの」「どうして電話に出ないの」と四通五通ものメールが届いた。

Bは拳を握って打ち震えていた。暫らくなにも言わないので、好男子が怖る々々様子を窺がう。Aの位地からは殆んどBの背中しか見えなかった。Aも、震える。なぜ震えているのか分らない。Bと好男子が二人で歩いているのを見懸けた時の様に、胸がぎゅっと締った。胸の中には「しめた」とBの隣りが空席になることを喜こぶ心もある。然し夫は、むりやりに左右思った心のようで、ぎゅっと締られて潰れる。

Bは「あなたも」と独語いた。独語いて足早に去った。AはBが突然動いたので狼狽える。こっちに向って来る。身を隠す場所をと探したがどこにもなかった。周章した所でBと出喰わす。Bは立ち止った。驚いたようだが、泣いていない。「海」Bはぼそりと言

った。「行く」歩き出した。

Aは自分が言われたのかわからなかったが其場に居づらかったためBに蹤がった。振り返ると、好男子が難を逃れたという様に深く息を吐いているのが見えた。お前が傷けた癖に、自分一人が安心を得て落ちつくな、Aは部外者だから、彼を責めた。

AはBとバスにのったが、なぜ自分がここに居るのだろうと思った。居ていいのかと疑がった。Bの性格なら、「なんでいるの」や「消えて」ぐらいのことは言われそうなものだ。夫がないということは居てもいいのだろうか。Aは一所にいたかった。どうかして慰めたかった。然し生れてから真面目に生きた事のないAは、此真面目な場面に際会して、どう振舞う可きか迷った。Aが見て来た映画や、小説、まんがは何の力にもならなかった。あれらにはあれらの場合がある。ここにはこの場合がある。共通しているのは、唯、其所に人間がいるという其事のみだ。吾々のこと

は、吾々で、処理をするしかない。

Bはぶつぶつと独語きつづけた。Aは、迷いながら、怖れながら、一方でもしBに「帰れ」と言われた時、「君の力になりたい」抔と恰好をつけた台詞を言える様準備（或は妄想）していた。

バスは電車の駅に着いた。海までは、ここから、一時間余り掛る。

九

夏休みの間の話しだが、Aはおばあちゃんを亡くした。脳梗塞だか、肺炎だか、其んな話しを少し聞いたが忘れた。悲しかったが、かなり前から、覚悟をして置いた方がいいという話しを親から聞かされていたので、泣かなかった。けれど母親は泣いた。夫を見て、自分のことを、薄情に思った。

おばあちゃんは寝込んでいた時、「お父さんは私を守ってくれた」と何度か言っていた

らしい。夫が、星にいた時のことか、地球に来てからのことか、わからない。Aは人を守るということを思った。自分に出来るだろうかと、困難も、地獄も、想像し得ないのに思った。

葬儀を終えたAは、深夜、父親の運転する車にのって帰った。助手席の母親は眠っている。家に着く迄の間、父は、思い出す所があったのかぽつりぽつりと話しをした。

「おれのお父さん、つまり、おじいちゃんな、おれも会ったことないんだよ。おれが生れた頃にはもう死んじゃってたし。でも、母親、おばあちゃんからは能く話しを聞いたんだよな。〈立派な人だった〉って夫が口癖だった。星では結構いい位地にいたらしいんだけど、家族の命を守る為に、全部捨ててきたんだってよ。おれには出来ねえな。おれお前の将来より自分の給料の方が大事だもん、いや、笑ってっけどほんとに。まあおれ全たく偉くねえけど。星のこと？　一回、〈どうし

て出て行かなきゃならなかったの〉って子供の頃に聞いたけど、おばあちゃん眉間に皺寄せて、怖いんだよな、なんも答えなかった。だから、聞いちゃいけないんだって、子供心に思ったんだよな、家族だから聞けないことって、あるじゃん。お前もあるだろ？　彼女のこととか、言ったりしないだろ自分から、いない？　ああそう。お前も彼女作れよ。そうやって続いてくんだよな、少しずつさ、……」

父は前に割込んで来た車に、「あっくそ」と言ってクラクションを鳴らした。プ、と鳴って、話しが途切れ、黙って車は前へ進んだ。

Aは人を守ることを考えた。或は、地位を、或は、名誉を、金を命を捨てべき時のことを考えた。でも、自分が何者であるかも定まっていない自分が、果して人を守れるのか。守るというのは具體的に何をすべきなのか。卑見を言えば、守るというのは結果でしかない。自分の思想の発現として行動し、だ

れかを守れた時に初めて守ったとなる。どんなに用意しても、守るべき時、身體が動かなければ意味がない。

Aの思考は毫も現実に即していなかった。けれどAは考えた。おれは、どうしたら、Bを守れるだろう……在らゆる苦しい事から。

もしも一所に星に帰ることができれば、助けて上げられるだろうかと思った。星には星の、苦しいことがあるとは、考えなかった。

十

電車に乗っている間、二人は全たく喋舌らなかった。Aはそとを見て、海が見えた時「わあ」と思った。思ったというのは思ったということなので、口には出さなかった。Aは今年一度丈海に行った。Mが行こう行こうというので行ったが、なにが面白いのか分らなかった。Mは水着の女性らを見て興奮し、「慫慂しようぜ」と言った。Aは失敗するのが分り

切っているという理由で断った。やってみればいいのに。やる前から失敗を前提とするのは慎重とは号ばない。

其様なAだがこの時は「わあ」と思った。海というのは、見た丈で、心が湧き立つ気がする。Aが見たのは夕暮の海だった。橙が、波に漂って、照り輝やく。Bを見た。Bは俯向いて手で顔を掩っていた。共有できないAは、さみしい。

電車から降り、改札に向う途中で、Bは立ち止った。

「なんでいるの」

Aを見ていう。

「帰って」

Aが用意していた言葉は、Bに臨んで、散り散りに逃げた。或者は潰れた。或者は炸けた。Bの迫力は、Aの想像を超えて、怖い。

いつだってと思った。いつだって、おれの想像は、役に立たない。

「いるよ」

振り絞る様に声を出す。

「いるよ」

ばかの様に同じ言葉をくり返した。Bはなにも言わなかった。歩くので、ついて行くと、なにも言わなかった。

Bは只管に歩いた。猛烈に歩いている様だったが、背が小さく、歩幅が狭いので、簡単に跟いて行けた。

海岸沿いには国道が走っていて、其上を歩いた。波の音が絶えず聞えた。車の音も聞えた。トラックの音も。大音量で音楽を垂れ流すオープンカーに、若者が数人乗って「ほう」と叫んだ。

「私は」

トラックが通る時、Bが叫んだ。しかしトラックが遠かって、騒音が小さくなると、声も縮んだ。Aは慌てて馳け寄ったが聞き取れなかった。おれはいつも機を逃すと自分を責めた。

コンビニを一軒すぎ、二軒目に出喰すと、

そのそばにBは座った。はあはあと息を吐いて、膝を抱える。Aはジュースを買ってBに渡した。なにも言わずに受け取った。コンビニには多くの車が停っていて、大勢の派手な若者がいて、もし絡まれたら怖いから出来るだけ早く此所を離れたいなあとAは思った。

Bはジュースを飲み干して立ち上った。Aが手を差し出すと、缶を渡す。Aが捨てている間にBは国道から砂浜に下りていた。もう日は落ちている。夜の砂浜は暗く、砂が重く、歩きづらかった。夫でもBは歩いた。今度は駅に向って歩いている。Aは夜の海が、砂以上に重く、波の音が圧力をもって響くことを、知った。

歩幅が狭いBは、砂に足を取られ、遅かった。Aはいつか追い付き、追い越し、一度靴を脱いで中に紛れた砂を落した。暗がりに身を寄せた恋人がキスをしているのを見付けて目を逸らす。こんな所でと思った。ドサリと音がした。振り返ると、Bが、転んで手を突

いていた。

「私は」

激しい呼吸をしながら、独語いた。膝は砂にのり、手は砂に埋れ、顔は砂に近い。Ａは是は助け起す可きだろうなと思った。然しＢの身體に触れるのは躊躇された。おれが、触ったら、嫌がられないかなと思った。Ｂは叫んだ。

「私は！　なにか、特別なことを望んだ訳じゃない。私の、ことを、知って欲しかった丈。知りたいと思うでしょ？　好きなら知りたいと思うでしょ？　なんで、だれも、彼も、逃げて行くの。好きだって言ったじゃない。なら知ってくれて好いじゃない。私は、だれか、分らないの。このままじゃずっと分らないの。だれか答を出してよ。私が、だれなのか、教えてよ。私の話しを聞いて考えて理解して、やさしく、私に教えてよ。私はここじゃ生きていけない、この世界じゃ生きていけない。私が、私らしく生きられる所に、連れて行っ

てよ。自分一人じゃ行けないの。だから、だれか、遠くに……」

そんな世界はどこにもない、〈自分らしさ〉なんて、糞みたいなもんだ、Aは其んな思想を持っていなかった。Bは好きだと言われたのでなく、言わせた、或は、言っていないものを言ったかの様に記憶を改竄した、また、自分は好きな相手のことを知ろうとしていない事実を、Aは知らなかった。更に言えば、波の音に消され、途切れ々々にしか聞えなかった。けれどもAは手を差し出した。

「おれは、よくわかんないけど、左右いう時になんて言うかは知ってるよ」

波に負けないように言う。

「助けてって言うんだよ」

Bは顔を上げた。暗くて、顔が、確とは分らない。夫でも其顔立が端正なことは分った。波の音がし、かすかに車の音が届き、遠くで禁止されている花火をやって騒ぐ若者がいた。夫でも静かだった。AはBを待った。体勢

を保つのが、窮屈になってきたが、動かなかった。夜は静かだった。朝が来るまで、夜は、動かない。

やわらかい感触がした。差し出した手の上に、Bの手が置かれていた。又顔を伏せている。砂の上に、答はないよ。思い付いた台詞を、言おうとして、恥しくなって、廃めた。気取っていると思われたら、赤面するな。どっかで聞いた様な気もするしな。でも言ったらかっこ付くかなあと迷っていたら、声がした。

「助けて」

蚊細い声だった。Bは顔を上げた。

「助けて……」

AはBを引き上げた。軽い身體だった。立たせた拍子によろめいて、Aの両腕にしがみつく。AはBを支えて言った。

「おれ、なんも出来ないし、知らないけど、これぐらいだったら出来るよ。助けて欲しかったら、助けてって言っていいんだよ。これ

ぐらいじゃ足りないかもしれないけど、これぐらいなら、きっと誰でも出来るよ」

Bは Aの服の肱を、強く攫んだ。足場が崩れていく時の様な強さで、Aに倚った。Aは夫でもBのことを軽いと思った。全身の力を使ってこの程度なのか。弱いから、軽いから、守りたいと思うのか。波に勾引われない様に、Bのそばにいた。

「足りない」

Bは言った。

「足りない」

言いながら泣いた。しゃくり上げ、鼻を啜り、泣き声は段々激しくなった。うまくいかないなあとAは思った。Bの手は砂に塗れ、膝にも砂が付いていることに気づいた。払って上げたかったが、Bが攫んでいるので動けなかった。手の砂がパラパラと落ちた。服が砂で汚れたが、不快じゃなかった。Bは、外聞も、虚勢も勘定に入れず、泣いた。みっともなかった。Aだけは、みっともないと、思

わなかった。

十一

最近、Aは、E君なるものと能く遊ぶ様になった。覚えていない方は思い出さなくてよいが、Aに忠告をして来た男だ。Mとは、段々、遊ばなくなった。同じクラスであるし、学校では話すことも多いが、平生遊ぶことがなくなった。時々、遊ぶと、違和感を覚えた。

女の話しが多い。だれがかわいいだの、いい身體をしているの、興味の対象が狭すぎやしないかと思う。Mからすれば、Aは、超然ぶって興味津々なのを隠していると思う。お互が、お互に、違うことを思う。

AはMを心中で難じようとして、廃める。これも思い出さなくてよいが、不良に絡まれた時を思い出して、自分はMを裏切ったと思う。だから、Mを難じるのも筋違いだと、大袈裟に考える。夫が又二人を距てているとは、

思い得なかった。

Mは疾(と)うに忘れている。思い出しても、重大事件とは思わんだろう。夫(それ)でもAは其(その)時のことを考える。Mが忘れている、大したことと思っていない、可能性も考えるが、又(また)同時に今でも恨みに思っている可能性を考える。だからAは忘れることが出来ない。だからMと離れて、楽になった部分も、隠さずに言えばある。

或(ある)日家に帰ると、父親が言った。

「うちの星がなくなったらしい」

話(はな)しを聞くと、星の寿命が来たのか、ほかに原因があったのか、爆発して消滅したと言う。父親は「あーあ」と言って畳に寝転んだ。

「おばあちゃんが死んでからで、まあよかったかな」

「死ぬ」という露出(むきだし)な言葉を使った父親に、苛(いら)っとした。然(しか)し、自分は自分で、悲しんでいる訳ではなかった。Aが気づいたのは、自分が星を逃道(にげみち)として考えていたことだった。

いざとなれば、星に帰ればいい。探す佯(ふり)をして、頼っていたんだと気付いた。ここまで考えて、パソコンを落(おと)した。長時間インターネットをしていたので、伸びをする。顧(かえり)みて考えたのは、宇宙人がいるかいないか、其(そ)んなのはどうでもいいということだ。もし出会うことが有ったら、いたと言えばいいし、出会うことがなかったら、いなかったと言えばいい。ほかにも考えることは沢山(たくさん)ある。冷蔵庫を開けて牛乳を飲んでいると、インターフォンが鳴った。受話器を取って「はい」と言うと、相手が答えた。

「どーも宇宙人でーす」

酔った彼だった。呆れながら、急いでドアを開けた。